⑤ Serindia, II, p. 828 & 923.

⑥ ibid., p. 818 參照。

⑦ 回鶻語では ä を語頭に加へて ästiramati（時には istiramati）と書いて居るが、もとより Sthiramati を寫したものに外ならぬ。

⑧ 「唐」に對しては tavγač といふ語を用ゐてゐる。此の語については既に屢〻内外の學者が論じた所であるから、こゝには繰り返さない。たゞ tavγač を自分が唐と譯したのは、この回鶻文の原典なる漢文に「唐言安惠」とあるに鑑みたものであることを斷つて置けば足りる。

⑨ A propos de la date de Vasubandhu, B. E. F. E. O., 1911. 京都帝國大學文科大學叢書第三 Mahāvyutpatti, no. 3482 には、sthiramatih に對して〔漢〕意堅と見えてゐる。

⑩ ペリオ氏の作つたビブリオテーク・ナショナルの同氏蒐集漢文書目錄には ch. ler du 俱舍實論義疏と見えてゐるが、實は五卷迄がその中に收められてある。また題名中の「實論」の兩字間の傍に反點を附けてあるから、俱舍論實義疏と讀むべきであることと疑無い。

⑪ B. E. F. E. O., VIII, p. 506 及び Stein, Serindia, II, 827

⑫ üc lükčük 城といふ地名については、今これを何れの地とも定めかねる。

⑬ 前にはこれを mäk と讀み xulut に續けて人名と見たが、其の後字畫を仔細に判斷すると、m(ä)n と讀むべきであると氣づいた。普通回鶻文では何處の某といふ時には、地名の次にこの män 即ち「私」といふ語を置き、その次に人名を置くのが常で、こゝの場合では「ユチュ・リュクチュク城の人、余、クルト」(üč lükčük balïγ-lïγ män xulut) と書かるべきであるが、かゝる書き方もしたと見える。また前には yangi bosγutčï sarïγ tutung 即ち「新しく學びたる人サリク都統」を次の Asudai といふ名にかゝるものと見たが、今は之を改めてクルトにかゝるものと見る。